



物凄い音

物凄い音

若い頃、私にとって世界は刺激的すぎた。

電車の音も、人の笑い声も、太陽の光や瑞々しい花の色、雨の音、夜の眠れない時間……ぜんぶぜんぶ苦手だった。

世界は極彩色で目が眩み、

物凄く音と情報に溢れていた――

目次

物凄い音……5
子供嫌いな大人……10
こころのピアノ……14
ひだりがわにぬくもり……27
来たれ、最後の痛みよ……37
しあわせすぎて、からっぽの……44

物凄い音

ああもう、うるさいな。何も聴きたくない。

18歳の頃のわたし

「激情」

激情にまかせて私は今度なにを言うのだろう。

言いたいことはこれだけ。

好きです。

愛してます。

できれば

愛してください。

言う資格も、言われる資格も
きつと持ち合わせていない

「きこえない言葉」

どれだけ必要があらうと
君の手は二つしかない

だから両方塞いじまうなんて真似はよせ

カラの両手を空にのぼして
とどかない誰かに呟いた

俺の両手はあいたまま

「臆病者の弁解」

しがらみを振りきってまで自由になっても
幸せにはなれない

なりふりかまわずしがみついても

大切なものは壊れるだけだ

追うことも逃げることもできないじゃないか

「湿った感情」

いやというほど笑って
つい笑ってしまうほど泣いてしまいたい

きつとどっちもできずに
湿った木みために燃えない感情

いつまでもぶすぶすいってるのだろう

「シンプル」

「あなたのせいだ」と

言い切れるほど自分だけを愛することもできず

「自分のせいだ」と

思うほどに自分だけを憎むこともできない

うまくいかないね

どっちかひとつならば世界はシンプルなのに

「たからもの」

ちいさい頃につくった

捻じ曲がった硝子細工を

床に叩きつけて粉々に壊し

たんねんに靴の裏でしゃくしゃくと踏むのです

そうして形もとどめぬ

素材そのものになってしまった硝子の破片を

丁寧にあつめて

まとめて宝箱のなかにしまっておくのです

写真は無くしました

絵は破りました

ちいさくなった服はあげました

教科書はゴミ箱へ

幼心につくった糸電話はぶつりとはさみで切りました

ときおり硝子片を太陽に透かし

零れ落ちた光の粒に失明するかとおもう

目の痛みをうったえ泣きます

歩き続けた後ろにつらなる

硝子片の道を振り返り 涙がこぼれるのです

踏みつけてきた硝子達と

ただいま足元に落ちた硝子

それからこれから壊す作品達をながめてまた泣くのです

「繋がり」

強く繋がりうと思える決定打は
おそらく言葉ではない

だから繋がりうと思ったのならば
言葉以外の何かを通じたんだ
たしかに言葉が必要としなかった瞬間があるんだ

「雑草」

雑草のように
天から降る雨だけで強く生きることができたのならば
親を必要としなかっただろうか

子供嫌いな大人

ふて腐れた子供から、大人へ。
でもどうやれば大人になれるかなんてわかんないよ

二十代初期のわたし

「君へ」

君はいつもそんなふうに

人と関わりたくない

生きていたってしょうがない

そんなふうに言うけれど

君が今日も生きていてくれて

私と話してくれて

それでよかったと感じる人がいるんだよ

「財産」

わたしのもってないものを

たくさんかかえて

不幸せそうな顔をする人がいる

そんな人たちが

なんの価値もないと思いつながら抱えているものが

わたしはたまらなくほしい

「子供嫌いな大人」

子供は好きよ？ かわいいから

そんな言葉を聞くたびに

お前たちは子供のおそろしさを

知らないのだろうかと思う

生意気な口を利くから嫌いなわけじゃあない

言う事を聞かないのなんて計算のうち

やさしさなんて当たり前のように与えてやるよ

それが大人だからな

私が子供が怖いのは

餌を与えないと死んでしまうし

愛さないと恨まれるから

私は愛なんて知らないで育ったなんて
そんな陳腐な恨み言を言う子供じゃあなかったし
だから愛なんて与えないなんていう
幼稚な大人でもない

だけど私の先ゆく大人たちよ
お前たちの無慈悲な言葉に傷つけられた子供は
子供を愛することを恐れ
生きることを恐れ
愛し合うことを恐れ
孤独を恐れ
それでも次の世代を愛そうと努力している

傷つけあうことくらいわかっている
私はまだ大人になりきれない大人
子供を卒業するだけ子供でいられなかった子供

だけどあえて言うならば
君たちは子供のままでいいと思う

大人が大人であるためには
子供が子供である必要があるから
私はあなたたちなしでは大人でいることすらできない
そんな情けない大人なのです

ですから子供らしく生きてください
探求することに食欲に
苦しいことから逃げるように
むかつく奴の悪口を言いながら
迫り来る現実と戦いながら

あなたたちもいずれは大人になる

「理解」

理解されないなんて

そんなことを感じていたのは

すごく遠い昔のようで

でも本当はごく最近までそう思っていた

愛されていないなんて

そんなことを感じていたのも

やっぱりすごく昔のようで

でもつい最近までそう思っていた

何が変わって気にしなくなったのかわからないけれど

何かが私の中で変わってきている

こころのピアノ

わたしはピアノの旋律のように生きたい
そういう人になりたい

二十代半ばのわたし

「ことばにしがたい感情」

うまくいえないんだけどね

ピアノの音しかきこえないところに
いきたいんです

そうしたら

きつと落ち着くんじゃあないかなって
そうおもうのです

ピアノの音しかきこえないところに
いきたいんです

「『詩』を書くのをやめてから考えたこと」

詩を書きたいと感じてても手が止まっていた
私はきつとどこかで詩を否定していた

うまく表現できない幼稚な自分のこころの内を
誰かに見せたりするのが怖かった

ううん、違うね
否定されるのが怖かったんだ

お前の苦しみも悲しみも
お手軽で陳腐な不幸自慢だっていわれるのが
すごく怖かった

だから無理に笑って

「私はしあわせです」って魔法をかけた

今さら私が詩を書きたいと言ったら
誰か怒る人はいるでしょうか

今度はあなたをないがしろにしたりしないよ
陳腐なフコウで色彩することもしない
仮初めのシアワセで色彩することもしない

私のこころを書くよ
これが私だって伝えられるように
ひとつひとつに心をこめて

やっぱり私はあなたが好きなんです
詩も、小説も、エッセイも
私のこころの欠片たちがとても愛しいんです

「愛とか友情とかお金とか家族とか」

愛とか友情とかお金とか家族とか

何が一番大切っていわれて浮かぶものって

陳腐かもしれないけれど その程度

愛とか友情とかお金とか家族とか

それが何になるの？

って聞かれると答えられないけれども

普遍的な価値がそこにあるなんて思っていないけれども

お金より家族が大切とか

愛より友情が大切とか

そんなことも思わないけれども

だけどそのぜんぶを

まったくもらったことないひとに会ったとき

わたしは自分のもらってきたものの

陳腐さと無力さを知りました

私は無力でした

私の愛も友情もお金も

限界があったのです

ぜんぶあげることではできませんでした

そこまでの愛も友情もお金もあげる勇気がありませんで

した

あなたにもいい家族がいればよかったのにね

騙されても、罵られても、憎まれても

「あの人は家族だ」と思えるほど愛せる存在が

あなたにもいればよかったのにね

「呪われたおんなのこ」

「私は呪われている」

そう言う子に

そんなことはない

伝えることの無意味さを知っている

呪われてないという証に

差し出せるものなんて何もない

わたしは無責任に

「そんなことはない」

と言いました

愛情のある言葉をいっぱいかけました

私にどれだけの愛があるかなんて
ぜんぜん自信はなかったけれども

それでもわたしは言い続けました

「あなたは愛されるために生れてきたんだよ」

少なくともあなたに向けるこの想いは

義務からでもなんでもない、純粹な気持ちなのだ

呪われてないという証は何もありません

愛している証がほしいといわれても何もありません

資格証明みたいに

履歴書に書けると楽なのにね

2000年に誰々を愛しましたって

一生誇りに思っ

あなたの名前をそこに書くのに

「傷つきたい傷つきたくない」

傷ついた数だけ

やさしくなれるというのなら

世界で一番傷つきたい

傷ついた数だけ

自分を守りたいと感じてしまうなら

何にも傷つかない鋼のところがほしい

「一番傷ついた人が一番やさしかった。

一番やさしい人が一番傷ついていた」

そう友達が言った

傷ついた数だけやさしくなれるなら

どれだけ傷ついたらって何も恨まずにいられるよ

だけどね

傷ついた数だけ許せないことがあったんだ

やさしくなりたいのに

許せなくて、怒ることもできずに

傷つくことしかできなかったんだ

傷の数だけやさしくなれるというなら

私はいま、世界で何番目にやさしいというの？

どれだけ傷つけばいいの

あとどれだけ傷つけばいいの

「苦痛と悲しみ」

何が自分を助けてくれたのか考えた

普段なら愛だとかやさしさだとか

出会ってきた縁だとか家族とか

そんな答えになるのだろう

だけどたまに

苦痛と悲しみが

私を救ってきたと

感じるときがある

苦しいことを苦しい

悲しいことを悲しいと

感じる心があってよかった

私はなんて人間らしいんだろう

血のかよった人間だから

痛いし苦しいし悲しいんだよ

生きているってことなんだよ

感じているってことなんだよ

「三十歳になるまでに」

三十歳になるまでに
死のうと思っていた

美しく生きられないくらいならば
滅びたほうがマシだと思っていた

わたしも せかいも

今 わたしは大人なのでしょうか
本当に大人なひとなんて
ごく少数しかいないことを知っている

大人になりたい子供なんでしょうか

それとも子供のままでいたかった大人なんでしょうか
時間は経って

あと数年もすれば三十歳になります

三十歳になるまでに
死のうと思っていた

美しく生きられないくらいならば
滅びたほうがマシだと思っていた

世界は汚いけれども

わたしも汚れているけれど

まだ存在していたいと感じます
生きていたいと感じます

まだやりたいことがあるんだ

いっぱいこの十年でやりたいことができたんだ

「嘘をつきました」

嘘をつきました

嘘をついても

全然恥ずかしいと思いません

世の中は嘘があるから

真実が存在すると思うのです

嘘をつきました

嘘をついても

全然悪いことだと思いません

本当のことを言いたいときだけ
本当のことを言えばいいと思います

それが信じてもらえないならば

わたしが嘘つきだから 信じてもらえなかったのではな

く

わたしの真実の重さが

その程度だったから

信じてもらえなかったのだと思います

「エアリーディングは不可能」

空気を読むって何？

空気読まないどころか

空気なんていらなくない？

そんなふう言ってるけど

これでもとても気をつかってます

読むべき空気なんてないけれども

呼吸するための空気は必要だから

やっぱり快適な空気の中で

生きていきたいんです

「正義のヒーローと悲劇のヒロインの物語」

別に悲劇のヒロインになりたいわけじゃあないけど

正義のヒーローを見ていると

ぶっ殺したくなるのです

ああ！ 順調だったのですね

正しいことを正しいと主張して

今まで生きてこれたのがその証拠です

自分のいのち 賭けて何ができますか

死んでもいいと 何か主張できますか

自分の仲間を巻き込んで 何かをやりとげられますか

正しいことをして死ぬなんて馬鹿みたいだ

だけどうして笑えないんだろう

正しいことを正しいと主張するのを諦めた
悲劇のヒロインは

ペシミステイックな思いに打ち拉がれて
一歩も進めずに正しいことを馬鹿にして
それでやっとならんとバランスをとっているから

一歩も進めないから

正義のヒーローの生き方に
ちよつぱり羨ましいとも感じているのです

助けてほしいわけではないんだよ
自分の力で歩けるようになりたいんだ

「鏡の中の子供」

自分と向き合うことが大切だって
そんなことを言ってるあんたが
一番自分に嘘をついている

逃げたくなることだってあるでしょう
始めたことは最後までやるべきなんです

そうですか
やり遂げてこれたのは全部
自分の努力だけですか

どれだけ支えられていたかも
どれだけ認められていたかも

全部自分の実力で

ここまでやってきたのだと

そう言い切るのですか

自分と向き合う前に

憎い相手を見てごらんよ

あなたが置き去りにしてきた

ずっと否定し続けてきた

もうひとりのあなたがいるんだよ

憎い相手こそ抱きしめてあげてよ

「ずっと気づかずについてごめん」って

あなたの置き去りにしてきた子供に

あなたは謝らなきゃいけないんだ

「逃げていいよ」

何から逃げてもいいよ

だけど自分からだけは逃げないで

「雪が溶けた道路を見て思うこと」

あるとき光の中に溶けられたらいいのにね
雪みたいに溶けちゃったらいいのに

私のいた存在の証なんて一切残さず
きれいで透明な光や水になれたらいいのに

夜になるたび苦しくなるよ
あるとき魔法が解けたみたい
私は消えちゃうんじゃないかって

私のいた存在の証なんて一切残さず
道路の雪みたいに溶けちゃうんじゃないかって

何事もなかったかのように

小学生が登校して 車が通勤して

私の存在だけが消えちゃうんじゃないかって

忘れられる苦しさを知る前なら

存在が消えることなんて怖くもなんともなかったのに

「歌が好き」

音痴だけど

歌が好き

迷惑だけど

鼻歌を歌う

作詞する才能はないけれど

作曲する才能もないけれど

生まれ変わるとしたら

音楽になりたい

音符と声だけで愛される存在になりたい

「わたしという、レーゾンデートル」

わたしが存在してもしなくても

変わらない世界になんて、絶望していない

わたしがいることで何かが変わるかもしれない

そんな未来に少しだけ、期待している

わたしはとても影響力のない

矮小な存在だけど

ないよりマシだって、言ってもらえたら

そう感じているだけ

ひだりがわにぬくもり

生きていることは喜びの連続だ

二十代後半のわたし

「しあわせ」

コツコツ貯金して貯めた金みたいにさ
なくなるときは、あっさり消えるものさ

だけどなかったらないで
借金するみたいにさ、負債みたいに
抱えずにすむんだ

最初からないものには
期待せずすむんだ

夢をみているだけなんだ
しあわせがあれば、何が変わったのだろうって

「問いかけ」

魂に 問う

「あなたは何者なの？」

心に 問う

「あなたは何を感じているの？」

私自身に 問う

「あなたが自分だと思っているのは、本当に私なの？」

自分の衝動に 問う

「私は——何ができるの？」

答えは——

「いやな大人」

いやな大人になったな、

そう感じた日だった

いい子じゃあなかったし

いい大人になれるはずもないのだけれど

わたしは

どんな大人になりたかったのか

大人になればなるほど

わからなくなる——

「変わりたいと感ずるココロ」

信じてもらえないかもしれないけど
変わりたいと感ずているんだ

憎しみだけで生きる子供から
愛のある大人へ

だけど
どうすりゃいいのかわかんないよ

私はずっと
生きることで復讐しようと
それで生きてきたから

いまさら愛情とか、よくわかんないよ

だけど
変わりたいんだよ
変わりたいと感ずているんだよ

「明日を向く」

朝日が昇ってきた

わたしは過去の自分をふりかえって、つぶやく

「夜のわたしに、バイバイ」

ゴミを捨てなきゃいけないんだよ

靴をはかなきゃ

過去のわたし、バイバイ

今日のわたし、おはよう

明日のわたしに、よろしくというために

今日を歩き出す――

「言葉の雨」

言葉の雨が、降ってきます

大雨の日のように、洪水のように私に襲いかかります

土砂降りの雨の中で私は天を仰ぎ

雷の音を聞きながら

天に手をさし伸ばします

「わたしに言葉をください、書きたいものがあるんです」

言葉の雨が降ってきます

私は言葉を探します

真実のワンフレーズを

「祈るように……」

祈るように、言葉を探す

悲しみに沈んでいる何かに

無難じゃあない、真実の答えを見つけたくて

だけど神に祈ることはできない

言葉の中に真実の愛を探しているのに

神の愛には縋れない

なぜだろう

あなたを信じられないよ

なぜだろう
ありふれた愛は信じられないよ

「白くてふわふわしてやたらまぶしい何かが
降ってきた日」

天を仰いで

太陽をにらみつけた

「あなたは偽りのあたたかさだ

だから私はあなたのいない世界にいきます」

氷の城の中で、

ずっと氷の積み木で遊んでいた

かじかむ指先で

もう冷たい光はいらないと

氷のあたたかさにすがっていた

ある日、私の心に詩の欠片が落ちてきた

傷ついたハートの鍵だと、わたしの手のひらに

私は慄いた

その欠片はあまりにも白くまばゆく輝いていて

光に裁かれていたあの頃を彷彿とさせた

「あなたは何者？」

私は詩の欠片に聞いた

「あなたの涙です」

詩片は答えた

「あなたの涙のあたたかさが、わたしの正体です」

詩の欠片はひらひらと手のひらで踊りながら

私にそう言った

「紡ぎたいでしょう？ あなたは、わたしを必要として、呼んだのよ」

詩はやさしく私に微笑みかけた

涙が流れそうになって

私は慌ててその欠片に呟く

「だまされないぞ。どうせ偽ものなんですよ」

詩の欠片は鈴のように音符を奏でて

涼しく笑った

「でも、紡ぎたいでしょう？」

ごくりと息を呑んだ。

手のひらにある詩の欠片は、ペンに姿を変えて私の心に、言葉があふれる

——詩を書きなさい。

あなたの心の声を、つぶさに。

私の魂に言葉が降りてくる

書きたい。

だけどそこにはインクがなかった

書きたいのに、インクがどこにもなかった

私は「インクをください！」と叫んだ

私の目から

一滴の涙が、こぼれて

インクの代わりになった

「私を紡いで」

詩の欠片が私に呼びかける
やさしくおだやかに

だけど力強い、メッセージで

強くつまびく弦の音色でも

弱くおびえた音色でもなく

やわらかく自由に、音が降りてくる

言葉の音が、降ってくる

やわらかな 旋律でした

おだやかな 気持ちでした

やさしい 波でした

うつくしい 音色でした

あたたかでした

言葉の中に愛を探して

ずっと硝子片のような詩たちを眺めていた

どれも薄くて、尖っていて

私はその言葉たちに戸惑って、積み上げては崩していた

真実のあたたかさは、涙の中に眠っていた

私はペンをとる

私の心では詩の欠片が楽しそうに踊っていた――

「正しさへ向かうひたむきな姿」

「戦っているのは病気でもなく、誰かでもなく」

正しさで人は救えないけど
自分の信じる正しさへ向かおうとする

戦っているのは病気でも誰かでもない
自分自身と戦っているんだ

姿勢が

嫌な言葉、嫌な記憶

人を救うのだと思う

そういうものを全部許せるようになったら

だから私の衝動は

もっと違う私になれる気がするんだ

きっとそこにあるのだろう

「長い長い夢を見ました」

もう疲れて

真っ白な光の中に消えたいと思って
気づいたら気を失っていたようです

長い長い夢を見ました

ピンク色のハートに金色の針金がぐるぐるぐるぐる
そして金色の棘がいっぱい刺さっているのです

わたしはそのハートが可哀想になって

針金と棘をいっしょうけんめい抜きました

傷ついたハートは私に言いました

「傷ついた自分に留まらないで」

私はハートを手にとって

「今までであった許せなかったことをすべて手放します」

と呟いた

目が覚めたら魔法のようにすべてが変わっていた、なん
てことはない

いつものように朝は来たし、いつものように現実が横た
わる

だけど私の中にはやわらかなあたたかさが満ちていた

来たれ、最後の痛みよ

痛みと決別するときが来たようだ。
わたしは誰かにはなれない。
リルケにもなれないし、他の誰かでもない。

二十代後半のわたし

「私が誰かということ」

私に誰かになれと、言わないでください
それは私じゃありません

私が誰なのかは私が決めます
殴られてもなじられも

私は私です
それ以外にはなりません

私じゃない私が仮に私になったとしても
そいつがどれだけ素敵な人だとしても
どんなに好きになれる人だったとしても
私は、その人と違います

必要とされなくても

私は私です

誰も望まない知らない子でも

私は私のままでいます

誰も周りからいなくなっても

私は私のままでいます

あなたが、私に誰であってほしかったのか

そんなことは関係ないです

関係ないです

そんなものは、関係ないです

あなたが、誰でありたかったかも

誰かに誰かであることを強いられたことも

それは私には関係ないんです

関係あるのだとしたら

連鎖はここで終わりです

ここで終わりです

「私が悪かったとしても」

謝れない大人は かつこうわるい

謝れないのは子供でも かつこうわるい

そうわかってるけど

謝るのは

お前が詫びてからだ

そう言いたいこともあるんだ

私から詫びてもいいなんて

そんな気持ちは一切なくなることもあるんだ

詫びろと言うなら

先にお前が詫びるんだなと

子供でも大人でも

かつこうわるくても

ばかばかしいとしても

不毛だとしても

なにも生まれないとしても

絶対に先に謝りたくないということは

世の中に絶対あるんだ

「立つ」

誰も助けてくれないと
嘆くより

他人が笑ってることに
涙するより

這ってでも、生き残れば
それでいいんだ

馬鹿にした奴が捨てたものを
拾って生きる人生でもいいから

死なないことは

それだけで、すごかったんだ

今も生きてるんだ
まだ生きのこるさ

明日も

明後日も

明後日も

その次の日も

一週間後も

一ヶ月後も

半年後も

一年後も

ずっとずっと

笑った人たちが死んだあとも

孤独でも

知らない人しかいなくなっても

生きてやる

「みおとしがち」

何か言われるとするよ

嫌いだとか

腹立つとか

わかっちゃいないと言って

自分もなにもわかっちゃいないんだ

見落としがちなサイン

嫌いだとか

腹立つとか

もういらなくなってサインかもね

そういう言葉を

そう表現してるだけかもね

「かなしい」

まだ子供いないけど

その子供が、将来

「お前のせいで人生ぐちゃぐちゃだ！」
と言ったらかなしいが

「お前には、一切期待していない」
と言われたら

私は、もっとかなしい

とても、かなしくてしかたがない

「なんでもやればいい」

なんでもやればいい

なんでもやってみればいい

取り返しのつかないことは
ほとんどない

「寝る前の祈り」

気が向くと祈る

心ない言葉をかけてきた人たちに
愛を祈るときもある

私の命を粗末にした人たちに
あいつら死にますようにと
祈るときもある

どっちもあたしなんだ
変だよといわれても

わたしはそういう人

しあわせすぎてからっぽの……

欲しかったものが全部手に入ってめでたしめでたし。
さて、そのあとはどうしよう。

二十代後半のわたし

「心の空腹」

ああ腹減ったな

隣でむしゃむしゃ美味しそうに食べてる奴

俺のことも知らずむしゃむしゃ美味しそうに食べる奴

すっごく憎いな。

お前も飢えればいいのにと思う

けどどこかでお腹が空くと安心する

ここから先に進めないと安心する

空腹でいることで人が憎める

飢えることで人の苦しさが理解できる

呪いの言葉を吐きながら

それでも身近な誰かの幸せを願ってる

「どれだけ不幸を願っても」

どれだけ誰かが

私の不幸を願ったとしても

どれだけ私が

誰かの不幸を願ったとしても

百年経てば私もあなたも

不幸を願ったあいつも

存在しない

それを思うだけで優しくなれる

「アンビバレンツを愛して」

私を分裂させたのは誰ですか

こっちが正しいだのあっちが正しいだの
振りかざす意味もわからずに私を裁いた
数々の正義や道徳たち

私を分裂させたのは誰ですか

出来損ないの私をけなしたくらいで
あなたが完全な存在になるのですか

私を分裂させたのは誰ですか

一人で立っていける自信を身につけさせようと
出来てないところばかりあげつらって

私を分裂させたのは誰ですか

私は自分で分裂することを選びました

私の一部を殺して切り捨てるより

いっそ私のままバラバラになってしまおうと

私はバラバラになっても私です

ひとつひとつが私です

あなたを分裂させたのは誰ですか

ひとつひとつのあなたを受け止められるのは
他ならぬあなたです

「特別に平凡の魔法をかける」

特別は、平凡で打ち消せませす

ドラマチックな人生はどうでしたか？

そろそろそれもいいでしょう

これからは平凡で

楽しく愉快に生きていきませんか

つつましく、平和に

退屈なドラマが刺激的だと感じるほど

ゆったりとした人生でも

きっとあなたは楽しめますよ

「平凡に生まれた私から、平凡に生まれたあなたへ」

お馬鹿だからたまに

食べ物かわりに音楽を聴き

排泄のかわりに涙を流せたらと思う

どこにでも転がってる石ころで

ありきたりな言葉しか紡げないから

有名でもない音楽家の

心から歌った歌詞に感動し

喜びにあふれた音楽家の

心からの賛美に涙して

私も特別になった気がちよつとして
私も何か書けるような気がちよつとして

だけどペンを握ればとたんに

私はどこにでも転がる石ころに戻り

魔法は解けて 私の前を人が通り過ぎる

ありきたりな言葉しか紡げないから

ありきたりな言葉であなたに伝える

平易な言葉しか持っていない私は

平易な言葉でなるべく多くの人に伝える

音楽の才能なんてなかったし

詩の才能もなかったし

物書く才能だっただけのだけれど

私の捧げる言葉たちは

全部ぜんぶ、神様とみんなのためのもの
歓迎されてはいないかもしれないけど
それでも私は書き続ける

私に生をくれた母と世界に

あなたに生をくれた母と世界に

私とあなたを結んでくれた誰かと世界に

私が伝えられることは言葉ではなく

私に伝えられることは感動でもなく

ただあなたを愛しているということ

ただみんなを大切だと思っっていること